

南山大学人類学研究所次期共同研究「危機の人類学」連続プレフォーラム2
文化人類学会課題懇談会「危機の克服と地域コミュニティ」共催

2012年12月15日(土) 13:30~16:30頃
南山大学人類学研究所1F会議室にて

「なぜそこに人類学者はいたのか：危機社会とフィールドワーク」

【研究会の趣旨】

話者は2人とも人類学者あるいは民俗学者として核廃棄物処理施設の生み出す雇用やダム建設に伴う村の移転費用を巡って亀裂が生じるような状況にある地域社会の中でフィールドワークをした、あるいはせざるを得なかった。そのとき研究者としてどのようなポジションをとったか、現場体験からスリリングなお話をお聞かせ願えるだろう。そして人類学のフィールドワークの意味について根本的な議論が期待できるだろう。

趣旨説明 後藤 明 13:30-13:40

報告1 13:40-14:40

中生勝美(桜美林大学・教授)
「台湾蘭嶼島の放射線量測定調査と政治バランス」

【要旨】

2012年9月と11月に、台湾南部の蘭嶼島で環境放射線量の調査をおこなった。ホットスポットの発見により、この調査は一気に政治的な色彩を帯びたが、この事件をめぐる、マスコミ・NGO・政府機関の多方面で、今までにない経験をした。これをどのようにとらえ、今後どのように研究を展開していくのか、人類学、あるいは地域研究の新しい方向性を考えてみたい。

※ 中生氏の調査は11月17日のTBS報道特集で取り上げられました。

<http://www.youtube.com/watch?v=kHa55GXXJHc&feature=plcp>
<http://www.youtube.com/watch?v=3o7pDN7laHs&feature=plcp>

14:40-14:50 休憩

報告2 14:50-15:50

角南聡一郎(元興寺文化財研究所・主任研究員)
「奈良県吉野郡におけるダム設置と地域社会—S地区の移転に伴う民俗調査を通じて—」

【要旨】

本発表では、奈良県吉野郡S地区の移動に伴う民俗調査を通じて、ダム設置と地域社会の変容、もしくは地域コミュニティの終焉に際して、調査者には何ができるのか、地域住民にとってこのような調査はどのように受け止められたかを考える。

質疑応答 15:50-16:30